



星々の詩



anotherwork

1 章

アルミテスはもともと農家の娘でした。両親は朝から晩まで畑仕事に追われ、アルミテスもまた必死に両親の手伝いをしました。もちろん学校へ行く時間や友達と遊んでいる時間などありません。アルミテスは両親と共に一日の大半を畑仕事に費やしました。

しかし、そんなあわただしい日々の中に、ほっと一息つける時がありました。それは昼食後、一人で家の近くの丘でくつろぐときです。そこには大きなプラタナスの木が生い茂り、ちょうどいい具合に木陰ができあがっていました。アルミテスはそこで、ありもしないようなことを自由に頭に思い描くことが好きでした。そうすると、心の中がとてもすっきりするのです。

そんなある日のことでした。アルミテスはいつもように丘の上で一人で空想にふけていました。のどかな陽射しが枝の間から漏れて、心地よい風がふきわたってきます。アルミテスは辺りを見渡して誰もいないことを確かめると、いつもは出すことはない声を出して語り出しました。

「遠い、遠い昔、宇宙の果てで、小さな小さなお星さまが生まれました。その星はやがて成長し、……。」

しばらくたってから、向こうの茂みの中から何かが動き回る音が聞こえました。アルミテスは振り返って言いました。

「誰なの？」

すると、茂みからがっしりした体つきをした男が茂みの中から姿を現しました。男は透き通るような青い瞳をじっとこちらへ向けていました。

「心配はいらないよ」

おびえているアルミテスに男が静かに言いました。「偶然ここで眠っていたら、あなたの声が聞こえてきたものだから、つい……。」

男はテシオスと名乗りました。テシオスは、もしよければ話の続きを聞きたいと申し出ました。自分は貧しい家の出なので物語を聞いたこともなく、本もろくに読むこともできない。だから、ぜひあなたのお話を聴いてみたいのだとテシオスは言いました。

テシオスがあまりにも真剣に頼むので、アルミテスは仕方なく話の続きを聞かせてあげることにしました。それは小さな子供が好むようなたわいもないお話です。しかし、テシオスは一度も飽くことなく、ただじっと聴き入っていました。

お話が終わると、テシオスは「とてもよかった。」と一言だけ言いました。アルミテスは顔を真っ赤に染めてうつむきました。

それから毎日同じ時間にテシオスはプラタナスの木の下へやって来ました。そしてアルミテスのありもしないお話にじっと耳を傾けました。お話が終わってしまうと、二人は何も話そうとはしませんでした。

春のうららかな陽射しとともに、やわらかな風が吹き渡ります。プラタナスの木がゆれて、さざめく音だけが二人の間に響いていました。

2章

秋が訪れかけたときのことでした。アルミテスがいつものように丘へ行くと、テシオスがいませんでした。いくら待っていても、テシオスは現れません。そして、テシオスは次の日も、そのまた次の日もやってきませんでした。

アルミテスは仕方なくかつてのように一人きりでお話を語りました。しかし、もう以前のように胸が踊るような楽しさを感じることはありません。アルミテスはテシオスがいなければ、お話を作る気にもなれませんでした。畑仕事をしている間もアルミテスはテシオスのことばかり考えていました。そして、かつて二人でプラタナスの木の下でいた日々のことを思い出しました。

それはなんて幸福な日々だったのでしょうか。テシオスが自分の話を聞いてくれるだけで、アルミテスは心が満たされました。しかし、テシオスがいらない今、アルミテスには悲しくつらい思いだけが残りました。

プラタナスの木の下で、アルミテスはよく泣きました。テシオスのことを想えば想うほど、涙はとめどなく流れるのです。しかし、月日が流れるうちに、その哀しみはやわらいでいきました。アルミテスは熱心に畑仕事に打ち込み、もう丘へ行ってお話しを作ることもしませんでした。そして、テシオスのことを少しずつ忘れていきました。

その五年後、アルミテスは両親の勧めで若い商人と結婚しました。夫は貧しい家の出でありながらも立派に商売に成功した人でした。いつも陽気で社交的な夫は、舞踏会によく出かけては新しい友人を作り、自分の家に招いて話をするのが好きでした。アルミテスは幸福でした。経済的には何も不自由することはなく、その後男の子にも恵まれました。

3章

ある夏、いつものように夫が自宅に客人を招いてきたときの事です。客人の中にどこか見覚えのある男がいました。がっしりした体つきに、静かにたたずむ青い瞳——そうです。それは紛れもなくあのテシオスでした。アルミテスはさりげなく夫にたずねました。

「あの方はどなたでしょう」

すると夫は答えました。「あの方は立派な軍人でね、大変な才覚の持ち主なんだ。ほら、五年前に突然敵国の大群が攻めてきたことがあったろう？あの人に大活躍したのが彼なんだ。」

夫はテシオスがこの五年でめざましい活躍をし、軍隊の中でも中心的な存在であることを話してくれました。

その日、テシオスは他の客人とともに楽しそうに談笑していました。テシオスは話の中心になって、りゅうちょうに政治、経済、社会、芸術などの問題について語り合いました。そして、ときどきユーモアを交えて、他の客人たちを笑わせていました。アルミテスはそんなテシオスにあっけにとられながらも、もう昔のことなど忘れて、夫の妻としてふるまっていました。今さら昔の話をしたところで何になるわけではないのです。テシオスもまたアルミテスに話しかけることはありませんでした。

その後も、ときどきテシオスはアルミテスの家に招かれてやってきました。そしていつものように夫や客人たちと談笑し、夜の楽しいひと時を過ごしました。

4章

秋が訪れた頃、いつものように客人とともにテシオスがやってきました。しかし、いつもと様子が違って、どこか沈んでいます。アルミテスはそのことを夫にたずねると、夫は言いました。

「お気の毒に。あの方は最近、妻を病気で亡くし、一人きりだそうだ。」

アルミテスは台所から居間を覗き込みました。テシオスの顔はいつもと違って、青ざめて不気味なほどでした。客人たちがいつものように談笑している間、テシオスはじっと聞き役に徹していました。そして、客人たちの談笑が済むと、テシオスは夫に礼を述べました。

「今宵はこの上ないごちそうをありがとうございました。」

テシオスはなぜかそのとき、深々と礼をしました。夫はあわてて言いました。

「いや、いいんだ、テシオス。何も気にすることはない。ただ次の戦のことだけに集中してくれ。まあ、いつも通りやれば何ということもない戦だがな。」

テシオスは微笑みました。そして、家から出ていきました。夫はそれを見届けてから、自分の部屋がある二階へ行きました。

アルミテスはすぐにテーブルの後片付けにとりかかりました。皿を重ねてまとめて台所へ持っていこうとすると、椅子の上に財布が見えました。それはさっきまでテシオスが座っていた椅子です。アルミテスは急いでテシオスを追いかけました。ゆるやかに下る道を、どこか寂しそうに下るテシオスの背中が見えました。アルミテスはテシオスの名を呼びました。

テシオスはちょうど道の脇に植えられたプラタナスの木のところで立ち止まりました。アルミテスはそこまで駆けて行って財布を手渡しました。

「わざわざありがとうございます。」テシオスは静かにそう言って、じっとアルミテスを見つめました。アルミテスもまたテシオスをじっと見つめました。そして、しばらくの間二人は何も言わずにただ見つめ合っていました。どこからか風が吹いて、プラタナスの木がそっと揺れました。さざめく音が夜の闇に響き渡ります。

その瞬間、遠い昔の思い出が二人の脳裏にありありと甦りました。アルミテスがせきを切ったように昔のことを口にしようとする、テシオスがぼつりと言いました。

「お幸せに」

そして、テシオスは再びゆっくりと坂道を下って帰っていきました。

それからアルミテスの家にテシオスが現れることは二度とありませんでした。アルミテスがそのことを不思議に思って尋ねてみると、夫はため息をついて言いました。

「あの男は戦死したよ。わずかな兵で何十万もの大群に突っ込んでいったのさ。いったい何を考えていたんだろう。あれだけの才能があれば、もっと上にのし上がったのに。」

アルミテスはこのあいだの沈んだ様子だったテシオスを思い出しました。おそらくあのとき、テシオスは既に死を覚悟していたのでしょう。そして、あの晩が自分にとって最後の晩餐になることも知っていたに違いありません。アルミテスは最後にテシオスが「幸せに」とつぶやいたことを思い出して、胸が締めつけられるような思いでした。

奥の部屋で赤ん坊の泣き声がきこえてきました。アルミテスは急いで赤ん坊のもとへ行きました。赤ん坊はゆりかごの上で激しく泣いていました。アルミテスが必死になだめようとしても、赤ん坊はいっこうに泣き止みません。赤ん坊はお乳も飲みたがらず、肌着は何も汚れていませんでした。困り果てたアルミテスは、夫の仕事の邪魔にならないようにと、赤ん坊を抱いて家の外へ出ました。

もう夜も遅いせいあたりはしんと静まっていました。風はほとんどなく、夜の冷気が心地よく伝わってきました。

「ほら、見てごらん。星がきれいよ。」

アルミテスは夜空に輝く星々を赤ん坊に見せました。赤ん坊はしだいに泣くのをやめて、珍しそうに星をじっと見つめました。アルミテスはほっと胸をなでおろして、赤ん坊といっしょに夜空を見上げました。夜空には一面に星々が散らばっていました。アルミテスはそんな星たちを見つめているうちに、かつてテシオスに星たちの物語を語り聞かせてあげたことを思い出しました。

プラタナスの木の下にテシオスは毎日やって来てくれました。そして、自分が作ったつたない話にじっと耳を傾けてくれたのです。それはほんの短い時期のことでした。しかし、それでもアルミテスには、その頃がかけがえのない瞬間のように思われました。

アルミテスはあふれ出そうになった涙を必死にこらえて、赤ん坊を抱きしめました。そして、まだ言葉も分からない赤ん坊にささやきました。

「遠い、遠い昔のお話をしましょう。」アルミテスのかすかに震えた声が、そっと夜の闇に響き渡りました。

「それはまだこの世が闇に包まれ、何もかもが存在しなかったころのお話よ。」

赤ん坊は母親の顔を透き通るような瞳で見つめています。アルミテスはそんな赤ん坊をやさしく揺らしながら語り続けました。

「一番最初に生まれたのは、小さな小さなお星さま。宇宙の果てに生まれたそのお星さまは、やがてりっぱに成長し、自由に宇宙をかけめぐることができるようになった。そして、そのお星さまは喜んで自由に好きなところにでかけたわ。自分の生まれたところからはるかに離れたところへ、つぎからつぎへと。でも、そうしているうちにそのお星さまは、この世界でたった一人きりであることに気づいてしまったの。そこで、そのお星さまは力の限り叫んでみたわ。『誰か、誰か私と話をしてくれる人はいませんか。』でも、誰も返事をするものではなく、あたりはしんと静まったまま。そして、そのお星さまは宇宙の果てで一人、嘆き悲しみ続けた。そして、とうとうその悲しみに耐え切れなくなった頃、そのお星さまは誰もいない宇宙の果てで———。」

アルミテスがそこまで話し終えてから赤ん坊を見ると、赤ん坊は心地よさそうに眠っていました。アルミテスは赤ん坊のあどけない寝顔に微笑むと、もう一度夜空を見上げました。

頭上には、ひと際まばゆい光を放つ星がありました。そしてその周りには、その星を取り囲むようにして無数の星々が散らばっていました。星たちは互いに寄り添い合って、たった一人きりの星に何かを語りかけているようです。アルミテスはそんな夜空をしばらくのあいだ仰ぎ見て、それからまた家の中へと戻っていきました。